

続・ 珈琲の思い出 21

和樹の心はもう優子との食事のことではいっぱいだった。どの店がいいだろう？優子の好みは何だろう？いきなりはじめての食事からフランス料理のフルコースのような敷居の高いものは良くないような気がする……。優子はアルコールを飲むのだろうか？

すぐさま、優子にメールを送って尋ねたい気がしたが、今夜はもう遅いし、優子の夫がそばで見張っているかもしれない……。

そう考えながら、和樹はパソコンを起動させるとインターネットでおすすめの店を探していった。

翌日の朝、朝食を食べる前に台所のテーブルにつくと、和樹はいてもたってもいられなくなり、携帯を開いた。昨夜、優子との食事についてつけの店を見つけたのだ。

件名..おはようございます。

本文..お忙しい時間にすみません、食事の件ですが、今週の金曜日に「炭火焼・美鳥(みどり)」という店でいかがでしょうか？僕は行ったことはないのですが、ちょっとお洒落な焼鳥屋で人気の店らしいです。

一気に入力して送信した。すぐに返事が来るわけではない、とわかっていながらも、携帯のことが気になって、朝食の間もそわそわと携帯ばかりを気にしていた。

出社して昼休みになって、ようやく優子から返事がきた。

「和樹さん、メールありがとうございます。『炭火焼・美鳥』すてきなお店みたいですね、はじめて行くので楽しみです。金曜日、母に子供たちを預かってもらえるかどうか尋ねてからまたお返事差し上げますね。」(続く)

鈴木優子